

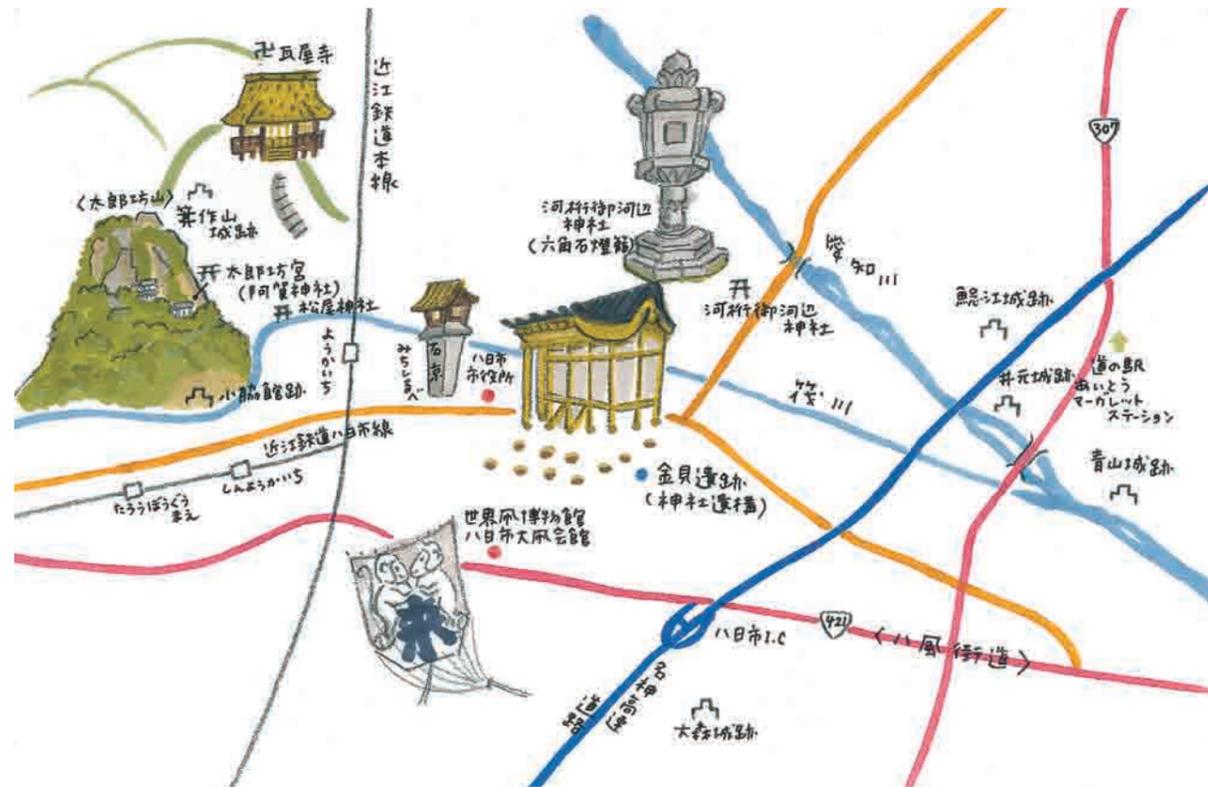
周辺の
みどころ

金貝遺跡で発見された神社遺構は、地元野村町の御厚意によって現地保存が決まり、現在は畑の下に眠っている。

金貝遺跡の北方750mに所在する河桁御河辺神社は、旧神崎郡内に二社しかない式内社のひとつとして地元の崇敬を集めている。ちなみに河桁御河辺神社本殿も三間社流造であり、今回見つかった神社遺構との関連性を指摘する意見もある。また、国指定重要文化財の六角石燈籠（鎌倉時代）も所在する。



河桁御河辺神社



[アクセス]

- 金貝遺跡
近江鉄道新八日市駅下車、東へ徒歩約3km。
近江鉄道八日市駅から近江鉄道バスで沖野下車徒歩10分。

[もっと詳しく知りたいひとへの案内]
(関連文献/関連施設)

- 滋賀県教育委員会『湖幸比古と豊湖比咩の世界』

愛知川の水利と神社遺構

東近江市野村町

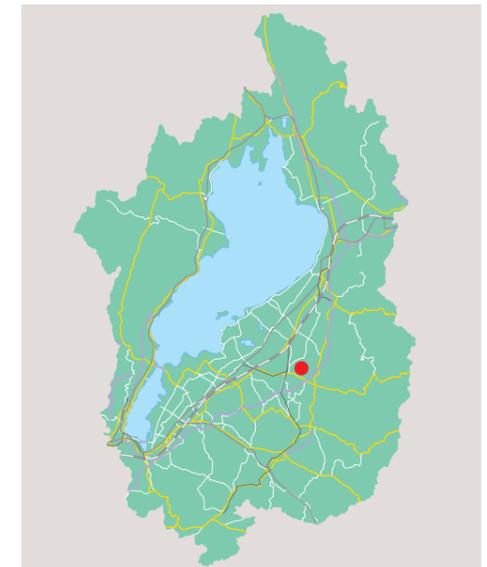


神社遺構が見つかった金貝遺跡の発掘調査区

鈴鹿山脈に源を発する愛知川は琵琶湖東部に広大な扇状地を形成し、琵琶湖へと注ぐ。

現在、湖東平野は県内有数の米穀生産地であるが、かつて先人達は耕作に必要な水を確保するために、多くの苦勞を重ねてきた。

ここで紹介する^{かなかい}金貝遺跡は、国内最古級の神社遺構が見つかったことで注目を集めたが、これは愛知川流域の大規模な土地開発の過程で、その土地の^{うぶすながみ}産土神の再編を行っていった可能性のあることを示している点で非常に貴重な資料である。





金貝遺跡で見つかった奈良時代の大型掘立柱建物

愛知川の水利と神社遺構(金貝遺跡)

所在地 東近江市野村町

愛知川から水を引く

旧八日市市域(現東近江市)を中心とする平野部は古来「蒲生野」と呼ばれ、広大な平野を形成する。しかしながら、平野部の大半は水を地下に浸透させやすい土質で、かつ愛知川の河道面より一段高くなって台地化した扇状地であるため水を引くには不便で、水田耕作にはあまり適さない地域であった。

愛知川流域の扇状地の開発がどの段階で本格化し始めたかについては不明な点が多いが、愛知川右岸の愛知井が白鳳期に遡る事例として知られているのみである。今回の金貝遺跡の調査では、愛知川左岸の土地開発が奈良時代後半では本格化していたことが明らかとなった。

灌漑用水路

金貝遺跡では、これまでの調査で3本の水路遺構を確認している。この周辺は愛知川によって形成された低位段丘上にあり、川の

水が自然に流れ込まない環境にあることから、見つかった水路は人工的に開削された灌漑用水路と判断できる。

愛知川両岸には10本の用水路が確認されており、先に紹介した「狛井(駒井)」もそのひとつに数えられている。金貝遺跡の東方約3kmの東近江市寺町のあたりで愛知川より引水し、金貝遺跡を通り、太郎坊宮の南側の小脇を抜けその先の安土町内野にまで至る。

水田開発の担い手

文献史料によると、奈良時代後半から平安時代にかけての時期に金貝遺跡の東方には奈良の大安寺が所有する荘園があったとされる(大安寺領柿御園庄)。

金貝遺跡で今回見つかった建物群は、一般の住居よりも規模が大きく、荘園の経営等に直接関わる施設であった可能性が想定されている。

金貝遺跡の北方には「駒寺」という地名と



奈良時代の灌漑用水路



平安時代の神社遺構と建物復元イメージ

ともに高麗寺が所在する。また、遺跡内には「狛井(駒井)」と呼ばれる水路、筏川が流れる。駒・狛(高麗)という地名、あるいは水路の呼称からは渡来人の関連が想起されるが、実際、大規模な土木事業には渡来系氏族の持つ技術が大きく寄与していたことがこれまでの研究で明らかとなっている。

この地域には、古墳時代中期(5世紀頃)高句麗から渡ってきた渡来人である桑原史一族が知られているが、奈良時代後半には大きな勢力を持っていたと考えられている。ひとつの可能性として、一帯の開発に直接関わっていた人々として、渡来系氏族も想定しておきたい。

金貝遺跡の神社遺構

金貝遺跡は、愛知川によって形成された扇状地の台地上に立地する集落遺跡である。発掘調査では奈良時代から平安時代にかけての灌漑用水路と大形掘立柱建物、神社本殿と推測される建物等が見つかった。これらは周辺の水田開発の拠点となる在地有力者の居宅や、公的施設であると今のところ考えられている。

神社本殿と推測されている建物跡は掘立柱で構成されるもので、現在の神社建築がその基礎に礎石を使用するのは構造が異なる。しかしながら、柱の並び方を検討すると、平面形態が三間社流造の神社建築と同一であること、周囲の出土遺物から平安時代前期まで遡る可能性があることなどから、現時点で国内最古級の神社遺構と考えられている。

遺跡内で見つかった神社遺構は、平安時代前期のものと考えられるが、十分な水の供給を得て豊作を願う荘園経営の中から生じた信仰から作られた、あるいは、大規模な土地開発の過程で、地域の産土神を統合していった形態のひとつとして、神社遺構を捉えることができるのではないかと考えられている。

金貝遺跡の調査成果は、古代から始まった愛知川周辺における開発が、現在の水田景観につながることを私たちに教えてくれる。